

# フランスの小都市ヌーシャテル＝アン＝ブレイにおける メインストリートのファサードに関する研究

A Study of the Main Street Façade in the French Village, Neufchâtel-en-Bray

住居学科 橋本 実希 片山 伸也  
Dept. of Housing and Architecture Miki Hashimoto\* Shinya Katayama

**抄 録** フランス北部ノルマンディ地方の小都市ヌーシャテル＝アン＝ブレイは、中世から幾度もの改変を繰り返してきたが、近代以降は主要交通のルートから外れ過度な都市化を免れてきた。本研究では、時代ごとの地図の比較と都市内の建築のファサードの類型化およびその分布分析から、中世来の都市構造の変遷を明らかにするとともに、メインストリートのファサード構成の歴史的要因を考察した。ヌーシャテル＝アン＝ブレイは中世から変わらぬメインストリートを保つものの、時代の変化に伴う都市の中心の移動や都市域の拡張など都市構造には変化が見られ、メインストリートも政治的空間から商業的空間へと機能をシフトさせた。また、戦災後の建替えの際には近代初期に建てられた邸宅型住宅の意匠を引用したと考えられる特徴的なファサードが見られた。都市構造とファサードの分析を通して、フランスの小都市における都市景観の変容の実態が明らかになった。

**キーワード**：フランス、ヌーシャテル＝アン＝ブレイ、都市景観、ファサード、パラモーション写真

**Abstract** Neufchâtel-en-Bray, a French village located far from other cities and major transportation hubs, has remained intact from the influence of urbanization, though it has been developed repeatedly since the medieval period. This study examines the urban development of Neufchâtel-en-Bray through the historical factors of the main street façade structure and by comparing the city maps from different periods. Neufchâtel-en-Bray has undergone many changes in the urban structure, such as the shift of the centre location and the expansion of the city, while maintaining the same main street since the medieval period. Meanwhile, the role of the main street has changed from political to commercial, and a new façade has appeared, which seems to have been copied from the villa style houses built during the beginning of the modern period. The analysis of the urban structure and façade helps us understand how the current townscape of the small village was formed.

**Keywords** : France, Neufchâtel-en-Bray, townscape, façade, paramotion photography

## 1. はじめに

### 1.1 研究の目的と背景

フランスはパリやリヨンのような人口10万人を  
超す大都市は数少なく、36,000以上あるコミュニ  
ヌ\*<sup>1</sup>の多くが人口5,000人にも満たない小都市で

ある<sup>1)</sup>。特に大都市から離れた田舎町では、その地  
域特有の文化も色濃く残り、古い建物と古くからの  
生活様式が現在に残るところも多い。その一方で、  
近代化に伴い人々の暮らしは変化し、都市構造およ  
び都市建築の意匠にも変化が生じたのではないかと  
考えられる。そこで本研究では、フランスのノルマ

\*(株)市浦ハウジング&プランニング

ンディ地方に位置するヌーシャテル＝アン＝ブレイを対象として、近代化に伴う都市構造と建築意匠の変化を検証した。

ヌーシャテル＝アン＝ブレイは過去の歴史の中で幾度も戦禍に巻き込まれ、イギリス軍やドイツ軍に占領された経緯がある。都市は破壊される度に再建を繰り返してきたが、現在は主要な公共交通機関のルートからは外れ他都市から孤立してきたことから近代以降の大きな改変はなく、ノルマンディ地方に典型的に見られる歴史的小都市と言える。

本研究では、時代ごとの地図の比較と今日の都市内の建物のファサードの類型化およびその分布分析から、中世来の都市空間の変遷を明らかにするとともに、メインストリートに見られる今日の都市景観の歴史的评价を行うことを目的としている。

## 1.2 ヌーシャテル＝アン＝ブレイの概略

ヌーシャテル＝アン＝ブレイはフランス北部のセヌ＝マリティーム県とオワーズ県にまたがる1コミューヌであり、23のコミューヌからなる同名のカントンの中心都市 (Chef-lieu) でもある。人口は4,872人、面積は11.0 km<sup>2</sup>あり\*<sup>2, 2)</sup> 日本の村に相当する。

そのカントンはペイ＝ド＝ブレイ *Pays-de-Brays* \*<sup>3</sup> と呼ばれるボカージュ地帯\*<sup>4</sup> の一部に位置しており、そのためヌーシャテル＝アン＝ブレイの地域では古くから農業が盛んで、フランス最古のチーズの一つと言われるヌーシャテル・チーズやバターを生産してきた。しかし近年は、セヌ＝マリティーム県の県庁所在地であり、オート＝ノルマンディ地域圏の首府でもあるルーアンと国道で結ばれ車での移動が容易であることから、ヌーシャテル＝アン＝ブレイからルーアンへ教育や職を求めて人々が流出していく傾向が見られている。

## 2. 歴史的都市構造

### 2.1 歴史的変遷の概略

ヌーシャテル＝アン＝ブレイは、その恵まれた地質環境に加えて、アブヴィルおよびアミアンとルーアンを結ぶ中間地であると同時に海港都市ディエップとパリを結ぶルート上に位置していることから戦略上の要衝であり、過去の歴史において幾度か戦禍に巻き込まれている。

ヌーシャテル＝アン＝ブレイの名に付けられて

いる新城 *Neuf Châstel* は、かつてドリンクール *Drincourt* の丘の上に構築された城を12世紀初頭にイングランド王ヘンリ1世の権限の下で要塞化した城のことを示し、同時期にノートル＝ダム教会もこの新城の近くに建設された。しかし1449年、百年戦争の際にイングランド王ヘンリ4世によって要塞は破壊され、その後ボーヴェがシャルル＝ブルゴーニュ公軍に包囲された1472年7月には、ノートル＝ダム教会を始め、サン＝ピエール教会や城など完全に都市が破壊された。その後1616年に一度市壁解体が着手されたが、1620年に市民に新税を課すことで市壁の修復が決定された。近代に入ると小売販売業が発達し、フランス大手銀行ソシエテ＝ジェネラル *Société Générale* の支店開設、高級レストラン・ホテルのグラン＝セルフ *Grand Cerf* が開業などフォス＝ポルテ大通りが商業の中心となっていった。しかし1870年の普仏戦争中にはプロイセン軍により都市を占領され、第二次世界大戦でも1940年5月19日、24日に市内中心部が襲撃された後、6月1日から1944年8月31日までの4年間はドイツ軍に占拠されていた。特に1940年6月7日の空襲は数日間火災を続け、都市は壊滅的に破壊された<sup>3)</sup>。戦後、行政の中心である市庁舎、裁判所、税務署や劇場は一か所に集約されて再建されている。

### 2.2 中近世来の歴史的都市構造の図解

中近世には政治と宗教の中心である新城 (A) とノートルダム教会 *Église Notre Dam* (B) が都市の中心であったが (図1)、20世紀初頭には市役所 *Hôtel de ville* (C) や市場 *Grand Marche Couvert* (D) など人々が集合する新たな場が都市内北東部に出現している (図2)。また20世紀初頭から工場や集合住宅地が発生し、現在も大型商業施設、大型集合住宅地、工業地域が旧市街地を囲むように建てられていることから産業構造や生活の変化による郊外への都市拡張が見られた。現在、市役所はメインストリートであるサン＝ジャック大通りからコーショワーズ通りに移転しており、多くの通行人の目には触れにくくなったものの、メインストリートと教育・公共施設のエリアを結ぶ中間部に位置し、他の公共施設と共に行政的地域を生みだしている (図3)。近代以降、都市の拡張に伴って行政の中心が歴史的な中心から移動したことがわかる。



図1 中近世の都市構造

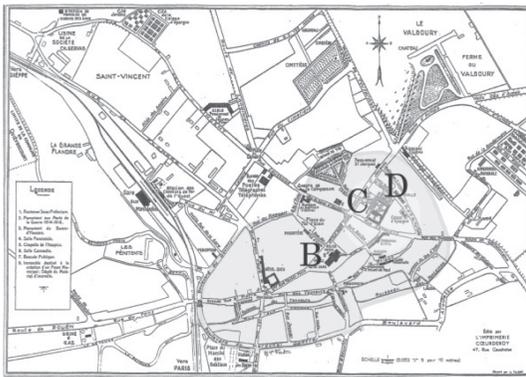


図2 20世紀初頭頃の都市構造

### 2.3 建築タイプに見る現在の都市構造

都市内の建物を大型、ユニット型、連続積層型、連続住宅型、独立住宅型、邸宅型に分類し（図4）、その分布と現都市構造の関係を考察した。

20世紀初頭以降の都市拡張で発生した大型商業地域、工業地域、低所得者居住地域ではほぼ大型ないしユニット型の1タイプのみによって構成されており、それら地域では同一の建築タイプによる均一な都市空間が形成されていた。一方で旧市街地、行政地域、教育-公共地域では多様な建築タイプが混在しているが、連続住宅型の建物が共通して見られた。建築タイプの多様性が都市空間の個性を生んでいるが、メインストリートに沿っては連続積層型に限られることから統一感のある街並みを生み出し、都市構造の変化による都市空間の変質を免れていると言える。

## 3. メインストリートの景観分析

### 3.1 ファサード調査の方法

本研究ではメインストリートのファサード分析を行うにあたり、パラモーション写真\*<sup>5</sup>を作製しデータを抽出した。パラモーション写真とは通り沿いの建物を連続的に記録するための撮影手法であり、壁のテクスチャや建物の使われ方などを記録しながら街路全体の持つ連続的な雰囲気や建物の保存状態等の図面に反映しにくい情報を読み取ることも可能にする<sup>4</sup>。そのようにして出来たメインストリートの左右2面分のパラモーション写真から外壁材、窓枠材、窓枠装飾の3要素を抽出し、模式的な連続立面図を作製した（図5）。

### 3.2 ファサードの類型化

都市内のファサードを外壁と窓枠の2つの素材はその組合せによって分類したところ、A石-レンガ+石-レンガ、B石-レンガ+非石-レンガ、C非石-レンガ+石-レンガ、D非石-レンガ+非石-レンガの4つの組合せに分類することができた。また、ファサード面の装飾については、H水平方向、V垂直方向、L格子、F枠組のみ、Nなし、Oその他の6つに分類することができた（図6）。メインストリートの建物について、素材と装飾の組み合わせによってファサードの構成を表にするとともに、その分布を立面上にプロットしたところ図7のようになった。

#### ①外壁材と窓枠材の関係性

非石-レンガ（BおよびD）の使用は教会対面側に多く見られた。また外壁材に関係なくフォス=ポルテ大通り・ノートル=ダム広場の建物は石-レンガ（AおよびB）の使用が多く、ノートル=ダム大通りは非石-レンガ（CおよびD）が主流であった。

#### ②素材と装飾の関係性

ノートル=ダム大通りでは教会側か否かに拘わらずC非石-レンガ+石-レンガとF枠組のみの組合せが高い割合で見られた。この組合せはメインストリート全体でも他タイプと比べて高い数値を示したため、この通りに支配的な装飾だと言える。しかしフォス=ポルテ大通り・ノートル=ダム広場に着目すると、その組合せ以上に教会側ではA石-レンガ+石-レンガとV垂直方向の組合せ（A-V）が、教会対面側ではB非石-レンガ+石-レンガとH

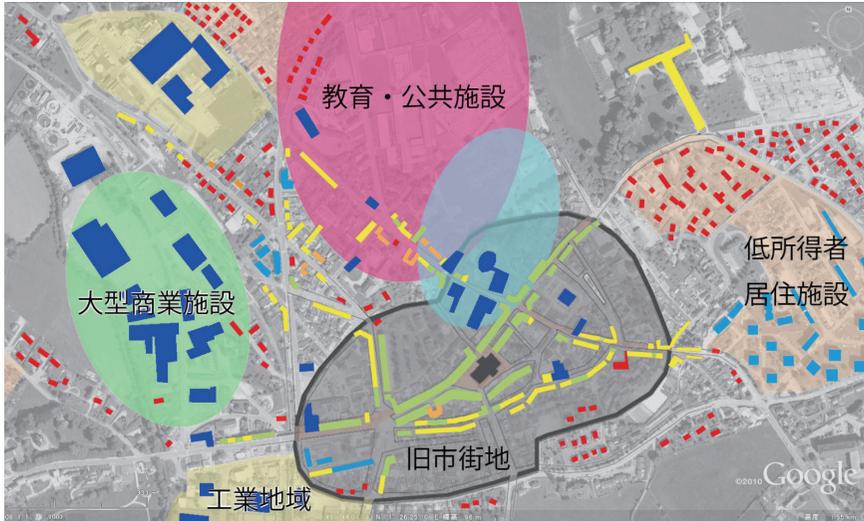


図3 現在の都市構造

大型 (青)	ユニット型 (水色)	連続積層型 (黄緑)
 <ul style="list-style-type: none"> <li>・大型建築である。</li> <li>・大スパンで内部に広い空間がある。</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・規格化された建築構造をしている。</li> <li>・建物の入口は各世帯共通。</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・1階と2階以上の用途が異なる。</li> <li>・隣の建物と壁を共有する。</li> </ul>
連続住宅型 (黄)	戸建て住宅型 (赤)	邸宅型 (オレンジ)
 <ul style="list-style-type: none"> <li>・隣の建物と壁を共有する。</li> <li>・所有物件一つずつに通りに面した入口がある。</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・戸建て住宅である。</li> <li>・庭がある場合もある。</li> <li>・邸宅型に比べ天井高が低い。</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・表面装飾が華やかである。</li> <li>・庭がある。</li> <li>・門があり、建物の周囲にも明らかな所有域がある。</li> </ul>

図4 建築タイプ別分類



図5 パラモーション写真と模式図の連続立面図

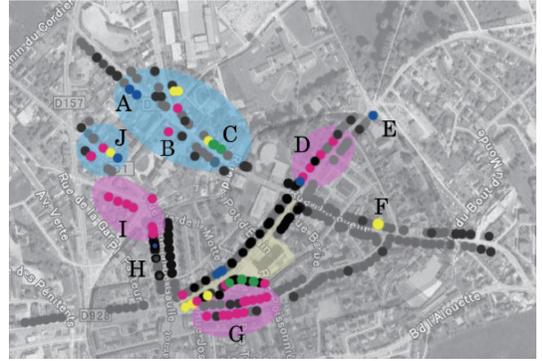


図8 都市内の装飾分布



図6 装飾分類

教会側全体

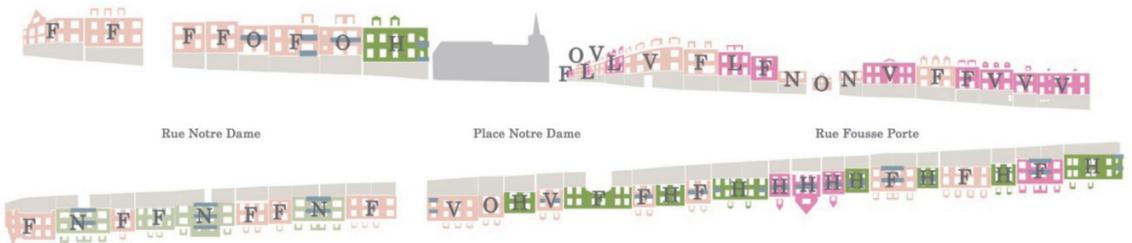
	A	B	C	D
H	-	3.9	-	-
V	15.4	-	7.7	-
L	11.5	-	-	-
F	11.5	-	26.9	-
N	-	-	7.7	-
O	-	-	15.4	-

R.ND 教会側

	A	B	C	D
H	-	12.5	-	-
V	-	-	-	-
L	-	-	-	-
F	-	-	62.5	-
N	-	-	-	-
O	-	-	25.0	-

Pl.ND/R.FP 教会側

	A	B	C	D
H	-	-	-	-
V	22.2	-	11.1	-
L	16.7	-	-	-
F	16.7	-	11.1	-
N	-	-	11.1	-
O	-	-	11.1	-



教会対面側全体

	A	B	C	D
H	10.7	25.0	-	-
V	-	-	7.1	-
L	-	-	-	-
F	3.6	3.6	32.1	1.9
N	-	-	-	5.6
O	-	-	3.6	-

R.ND 教会対面側

	A	B	C	D
H	-	-	-	-
V	-	-	-	-
L	-	-	-	-
F	-	-	55.6	11.1
N	-	-	-	33.3
O	-	-	-	-

Pl.ND/R.FP 教会対面側

	A	B	C	D
H	15.8	36.7	-	-
V	5.3	-	10.5	-
L	-	-	-	-
F	-	5.3	21.1	-
N	-	-	-	-
O	-	-	5.3	-

図7 ファサードの類型化の割合

水平方向の組合せ (B-H) の使用割合が高い。したがって素材と同様に装飾にもフォス=ポルテ大通り・ノートル=ダム広場とノートル=ダム大通りで相違が見られ、またフォス=ポルテ大通り・ノートル=ダム広場では教会側か否かで装飾の方向性が変化することがわかった。メインストリートの景観に見る都市空間の差異がファサードの装飾の変化に端的に表されていると言える。

### 3.3 ファサード類型の分布と考察

今日のメインストリートに固有の装飾が成立した要因を考察するため、A石-レンガ+石-レンガの組合せをもつ連続積層型、連続住宅型、邸宅型の建物を都市全域から抽出し、その分布を分析した (図8)。

その結果、AからJの箇所下同素材の使用が見られた。特にA, B, C, Jは共通して邸宅型の建物が見られ、その全てに垂直あるいは水平方向、ないしその両方向の装飾が見られた。またD, G, Iは同素材でかつ枠組のみの装飾をもつ建築物が連続ないし密集して建てられていた。

#### ①枠組のみの装飾

メインストリート全体においてこの装飾をもつ建物の割合が最も高かったことから、フォス=ポルテ大通り・ノートル=ダム広場で見られた装飾性が高い建物とノートル=ダム大通りで見られた装飾性が低い建物の間に位置し、中間的装飾と言える。市壁跡付近のB, G, Iにおいても見られることからメインストリートの装飾性をゆるやかに周縁部へと延長し、都市の歴史的中心部からの都市空間の統一感を生み出している。

#### ②方向性を伴う装飾

20世紀初頭の富裕層の住居であった邸宅型住宅に方向性を伴う装飾が多用されていることから、この装飾は高級住宅を想起させるものであったと考えられる。一方で戦後再建されたメインストリートでも方向性を伴う装飾が部分的に見られ、歴史的市街地の中では新しい装飾要素と言える。戦後再建の際に高級感を醸す邸宅型の装飾モチーフが旧来のメインストリートに流用されたのではないかという推測も可能であろう。また都市内にはハーフティンバーの住宅も見られ、かつては邸宅型以外にも柱梁形を装飾的に用いた建物も多かったことから、方向性を伴う装飾は古くから都市住民に親しまれたモチーフであったとも考えられる。

## 4. まとめ

ヌーシャテル=アン=ブレイは中世から変わらぬメインストリートを保つものの、戦後復興の際に新しい装飾を取り入れて建て直しがなされ、20世紀初頭とは異なるファサードが新しい都市空間を構築したと言える。そのファサードは教会側か教会対面側か、そしてフォス=ポルテ大通り・ノートル=ダム広場かノートル=ダム大通りかといった立地場所に大きく関係することが明らかとなった。装飾性の低い建物と高い建物を繋ぐように枠組のみの装飾がメインストリート全域で見られたが、20世紀初頭からメインストリートの中で特に商業性が強かったフォス=ポルテ大通り・ノートル=ダム広場では、従来メインストリートではあまり見られなかった方向性を伴う窓枠装飾が見られた。方向性を伴う装飾は中世からの梁と柱が装飾的に見られるハーフティンバーの建物を想起させ、ある意味では古くからヌーシャテル=アン=ブレイの人々に親しまれていたと言える。しかし装飾の類似性から、この建替えによる新しい装飾の直接のモチーフは近代初期に富裕層が好んで建てた邸宅型の住宅だった可能性も指摘できる。

本研究では、都市構造とファサードの構成要素の分析を通して、近代フランスの地方小都市における都市景観の歴史的評価の手法を提示した。更に詳細な史料の検証を加えることでより実証的な評価とするとともに、近隣都市との比較を行うことでより広範な地域性をも考察の視野に取り込むことが可能であろう。

## 註

- \* 1 フランスの地方自治体は国家規模である「国」から「レジオン (州)」, 「デパルトマン (県)」, 「カントン (郡)」, そして地方自治の最も基本的な単位である「コミューヌ (市町村)」によって構成されている。2011年現在で36,568のコミューヌがフランス国内にある。
- \* 2 2009年において。
- \* 3 粘土質の土壌をもっていることから「ぬかるみの国」を意味するこの名が付けられた。
- \* 4 ノルマン語で「小さな林と牧草地が混ざり合った」ということを意味する。

- \* 5 Parallel Motion Photography の略。法政大学建築学科陣内研究室が都市研究で用いた手法。

#### 参考文献

- 1) 藤本信義, 楠本侑司, 和田幸信: 建築探訪 12, フランスの住まいと集落, 丸善出版, 東京 (1991)
- 2) INSEE: <http://www.insee.fr/fr/bases-de-donnees/esl/comparateur.asp?codgeo=COM-76462> (2012.9.23)
- 3) Boitel P.: Histoire de Neufchâtel-en-Bray, AGPB-76.60, Rouen (2010)
- 4) 法政大学建築学科陣内研究室: OTRANTO 一生活感あふれるバカンス都市一, 法政大学エコ地域デザイン研究所, 東京 (2009)